

日本人男性の3人に2人、女性の2人に1人が、生涯になんらかのがんに罹患します。がんは、喫煙や多量飲酒など、生活習慣が女性よりよくない男性に多い病気です。

しかし、がん患者の数は、54歳までは、女性が男性を上回ります。20代では、女性患者は男性の1・5倍ですが、30代、40代とも2・5倍にもなります。50〜54歳でも女性が男性の1・5倍ですが、55歳以降は男性患者が急増し、全年齢については、男性は女性の1・32倍となります。

定年が55歳だった時代、男女とも働くのが当たり前だったら、働くがん患者は圧倒的に女性が多かったはず。定年が延長した現在でも、20

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

働く女性への対策が課題に

64歳の働く世代全体では、

女性の罹患数は年間約14万人で、男性を2万人以上上回ります。女性の就労率は7割を超え、増え続けています。女子社員へのがん対策が、さら

に大きな課題になります。

50代半ばまで女性にがんが多い理由は、乳がんと子宮頸がんが若い世代に多いからです。乳がんは女性ホルモンの刺激で増えますから、閉経後

は減少に転じ、40代後半がピークです。

性交渉に伴うヒトパピロームウイルス（HPV）の感染が原因のほぼ100%を占める子宮頸がんのピークは性的に活発な30代です。とくに性交渉開始年齢の若年化などにもなっており、子宮頸がんが20〜30代で急増しています。

このウイルスの感染がなければ、子宮頸がんの発症はないと言えます。

性行為を始める前の女子に対してHPVの予防ワクチンを接種することでリスクは大きく回避でき、欧米の多くの国では男子への接種も行われています。

わが国でも2010年からこのワクチンへの公費助成が始まり、13年4月には定期接種となりました。接種率も一時は7割に達しましたが、運動障害といった「副反応」が報道されるや、厚生労働省は接種の「積極的な勧奨」を中止しました。以後、接種率は0・3%と低迷しており、大きな問題となっています。

（東京大学病院准教授）